

## カザフスタンのアルマトイ市の第四次・第五次五カ 年計画におけるソビエト政権下の都市計画・建築様 式の概要

諸喜田, 真  
フリーランス

<https://doi.org/10.15017/7390844>

---

出版情報：都市・建築学研究. 48, pp.27-42, 2025-07-15. Faculty of Human-Environment Studies,  
Kyushu University

バージョン：

権利関係：



## カザフスタンのアルマトイ市の第四次・第五次五カ年計画におけるソビエト政権下の都市計画・建築様式の概要

### Overview on urban planning and architectural styles under the Soviet regime in the Fourth and Fifth Five-Year Plans in Almaty, Kazakhstan

諸喜田 真\*  
Shin Shokita

From the 1940s to the 1950s, Soviet architecture underwent a transformation emphasizing the integration of innovation and tradition. A conference of architects in 1940 highlighted this dialectical unity. Following World War II, the Soviet Union established the Committee on Architecture to guide postwar reconstruction. The directive by the Communist Party in 1946 and 1948 promoted the folk art of various republics, promoting socialist realism in architecture and urban design. In Alma-Ata, residential buildings incorporated monumentality, Italian Renaissance features, folk motifs, and pointed arches, etc. By the Fifth Five-Year Plan, architecture in Alma-ata increasingly blended classical and folk elements, integrating eclectic or dialectically, new Lenin's "two cultures" was realized in that ways.

**Keywords** : Soviet architecture, Urban design, Kazakhstan, Almaty, Stalinist architecture, National style  
ソ連建築, 都市計画, カザフスタン, アルマトイ, スターリン建築, 民族様式

#### 1. はじめに

##### 1.1 研究の背景

大祖国戦争後の1945年からスターリンに変わりフルシチョフが政権を握る1955年までの第四次(1946年から1950年)・五次五カ年計画(1951年から1955年)におけるソ連時代のカザフスタンのアルマトイの建築に関する論文は2024年の諸喜田真の論文1.1項にて言及された論文<sup>文献1)</sup>を除いてこれまでに、エリザベータ・マリノフスカヤによる「Теория и практика «национального стиля» послевоенного десятилетия (戦後10年間の「民族様式」の理論と実践)」(2017年)は戦後のカザフスタンの民族様式の建築に関する論文である。

この時代の建築に関する書籍として出版されたものは、前述の2024年の諸喜田真の論文1.1項にて言及されている通りである。

##### 1.2 研究の目的と方法

第四次・第五次五カ年計画におけるソ連時代の都市計画や建築において、建築様式の傾向はサモイロフの論文により立面上の装飾等の要素に基づいて明らかにされて

いるが、ではなぜ古典様式から国家・民族様式へと移行されていったのか、当時のソ連の建築界の動向が記述されていないため明らかにされていない。また前述のマリノフスカヤの論文も当時のアルマ・アタの状況について言及しているが簡略的に記述されており、著作の「Памятник современной архитектуры (近代建築の記念碑)」(2018年)においてアーカイブなどの資料を基に更に掘り下げて記述しているが、中央の政治・建築的状況については言及されておらず、戦後の10年間の建築を「ルネッサンスと東洋の技術の統合」<sup>文献2)</sup>としたが、どのように統合されたのか記述がなく、建築の平面構成や立面の要素についての分析も行われておらず、これらがどのように統合され移行していったのか考察する必要がある。

その考察を行う方法として中央の政治・建築界の動向を通史として記述する必要性があるため、これまで出版されてきた書籍・雑誌などの二次資料をレビューし、ソ連の第四次・五次五カ年計画における共産党による政策・決議や当時の中央の建築家の発言や言説・論考を時代順に記述していき、アルマ・アタの都市計画・建築にどのような影響をもたらしたのかを考察し、都市計画・建築様式の変遷を本稿にて明らかにしていく。また論文や二次資料をレビューし明らかにされていない項目を抽出し、今後どのような研究が必要かを考察していく。

\* フリーランス

## 2. 戦時中から戦後にかけての政治・建築界の状況

1940年4月モスクワにてソ連建築家連合理事会の主催により、モスクワとレニングラードの建築家による創造的な会議が開催された。A.V.ヴラソフによるモスクワの建築家の創造性、L.A.イルリンによるレニングラードの建築家の創造性、モスクワとレニングラードの建築家による演説がプログラムに含まれ、ソビエト建築の基本的な創造的問題を提起する会議が行われた<sup>文献3)</sup>。

K.アラビヤンは「今日の会議と我々の批評は建築遺産の発展が過去の文化要素の無原則な流用にならないようにするのに役立ち、建築家がこの遺産を深く研究し真に創造的に習得できるようにする必要がある(筆者訳)」<sup>文献4)</sup>とし、レニングラードの元主任建築家イルインは

「我々はバロックよりもおそらくルネッサンス様式の文化を尊重するが、我々の尺度と共にバロックの空間的構成の達成を更に推し進め発展させ身近に必要なものとしなければならない(筆者訳)」<sup>文献5)</sup>とし、レニングラードに建設されたN.A.トロツキーの設計によるソビエトの家<sup>注1)</sup>を取り上げ、「トロツキーがレニングラードの古典を継承し発展させているというのは誤解で、(中略)ベーレンスは悪いドイツ人建築家ではないが、なぜ彼の旧大使館ビル<sup>注2)</sup>、つまりこの街のロシア建築におけるプロイセンのエピソードをそんなに好むのか。正面ファサードの『ベーレンス主義』は明らかだ(筆者訳)」と非難した<sup>文献6)</sup>。そのトロツキーは「モスクワのイオファンの建築はアメリカ主義であり、ダイナミクスの探求だと思われる。イオファンの作品には簡潔さ、記念碑性という非常に重要な要素がある(筆者訳)」<sup>文献7)</sup>としたが、「アメリカ主義の立場にこだわる必要はない(筆者訳)」<sup>文献8)</sup>とした。そしてイルインに批判された事に対し「この建物で私はレニングラードの古典主義の伝統を継承したいと考えた。もちろんこれはベーレンスからもイタリアのルネッサンスからも、そしてアメリカ主義からも遠く離れている(筆者訳)」<sup>文献9)</sup>と主張した。

レニングラードの建築家B.ルバネンコは「ルネッサンス宮殿建築のかつての支持者は基本的に全てを壁面だけに限定し他を忘れており、モスクワの中庭に入るとそれは不快なもので、この中庭に対する関心がないだけでなくこの中庭を手入れしたいという欲求さえ無い(筆者訳)」<sup>文献10)</sup>と非難した。

モスクワの建築家N.P.ビルンキンは「中世よりも進歩的な新しい社会がギリシャ建築に目を向けたのがなぜルネッサンスの黎明期だったのか、歴史的に見ても全く偶然ではない。コルビュジエやベーレンスの方が年代的に近いにも関わらず我が国の建築家たちがブルネレスキに若々しさを感じて群がるのはまさにこれが理由だ(筆者訳)」<sup>文献11)</sup>と説き、レニングラードの建築家G.A.シモノ

フは「ギリシャ芸術とブルネレスキのスローガンは拡大されるべき(筆者訳)」<sup>文献12)</sup>とした。

モスクワのV.A.ヴェスニンはモスクワの建築について、「断片の選択とその解釈において我々は多くの悪趣味、多くの混乱と無原則を持っていることにも注意すべきでその近くの断片はイタリア、フランス、ドイツ、スペインのルネサンス、ゴシック、ロシアのバロックなどから取られている。建築家はスタイルやイデオロギーの内容の統一性を忘れこれらすべてを機械的に壁に貼り付けている。(中略)ソビエト建築は過去の建築の様々な要素をランダムに組み合わせて作成することはできない。建築遺産は批判的かつ創造的に習得されなければならない(筆者訳)」<sup>文献13)</sup>と強調した。

この会議に参加し発言も行っていたモスクワの建築家Ya.A.コルンフェルドは「ソ連の建築」1940年第7号に寄稿し、「モスクワは未だに遺産開発の『悪徳』に甘んじているのに対し、レニングラードは既に革新の美点に彩られているという結論である。その証拠に『モスクワ・ルネッサンス』の精神で活動する建築家たちの将来性のない『壁』の創造性がレニングラードの建築の進歩的な『フレーム』の原理と比較されている。(中略)モスクワの水平性を強調した三層に分割された住宅建築もレニングラードの垂直性を強調した建築と同様に重要であり、我々の建築の主要なスローガンである『革新と伝統』を弁証法的統一において維持する必要がある(筆者訳)」<sup>文献14)</sup>と訴えた。

I.マツァは「ソ連の建築」1941年第1号に「伝統と革新」という論考を投稿し、「伝統の外にある革新、継続性の外にある革新、革新のための革新、『流行』のための革新は共産主義労働運動の革命的実践と理論によって決して認められていない。レーニンはこのことを特に芸術の問題に触れながら極めて明確に指摘した。(中略)マルクス・レーニン主義の思想はよき伝統を『古い』という理由だけで放棄するのではなく、『更なる発展への出発点』として新しいものを創造するもの(筆者訳)」<sup>文献15)</sup>と、伝統に基づいた革新が主張された。

国内の全ての建築活動と都市の修復に関する膨大な作業を管理するためにソ連人民委員評議会の下に建築問題委員会が1943年9月に組織され、この委員会は建築を直接担当する初の特別機関であり<sup>文献16)</sup>、モスクワの建築家A.G.モルドヴィノフがソ連人民委員評議会の建築問題委員長に任命された<sup>文献17)</sup>。その後の1944年に出版された自身の著書「ソビエト建築の芸術的問題」にて、ロシア古典主義建築の重要性<sup>文献18)</sup>、美しい都市や建築の定義、各民族の芸術、記念碑的建築の適用が強く謳われた<sup>文献19)</sup>。「都市や個々の建物の計画に取り組む際は古典建築の経験全体、ソ連建築の成果を考慮に入れる必要があり、また共和国の民族的特徴も考慮する必要がある。ロシア

とウクライナの人々が何十年にもわたって建設と建築の分野で生み出した素晴らしいもの全てを使用する必要がある」<sup>文献20)</sup>とウクライナ共産党第一書記であったフルシチョフの記事を引用し、「ソビエト建築の創造的探求の一般的な基礎を完璧に表現している」<sup>文献21)</sup>としてロシアやウクライナの都市計画や建築を探求するよう促した。

1946年3月共産党中央委員会により1946年から1950年までの第四次五カ年計画が発表された<sup>文献22)</sup>。戦後の復興が強く謳われ、産業と交通の発展、農業発展、人民の物質的および文化的な生活水準の向上は最も重要な課題とされた<sup>文献23)</sup>。同年5月に共産党中央委員会により「高品質の製品を一定の範囲で生産するための国家計画の履行と過剰履行、新しいタイプの製品の開発、労働生産性の向上と生産コストの削減計画の実施、住宅および文化建設の計画の実施（筆者訳）」が決定された<sup>文献24)</sup>。

1946年8月26日共産党中央委員会によって「ドラマ劇場のレパートリーとその改善策について」、1948年2月10日「V・ムラデリのオペラ『偉大なる友情』について」の決議が行われ形式主義に対する批判が行われたが<sup>注3)</sup>、「ソ連の建築を含む全ての文化芸術に対する更なる発展のプログラムが与えられ、民族芸術を用いない芸術は創造性がなく社会主義の思想に値しないと支持がなされ、各共和国の建築家を含む全ての芸術家は民族芸術をより研究し新たな創造性を伴った作品の創出を促進させていった（筆者訳）」<sup>文献25)</sup>。

アラビヤンは「ソ連の建築」1947年第14号にて「ソ連では今でもイタリア・ルネッサンスや古典建築がそのままコピーされており、（中略）西ヨーロッパやアメリカの模倣が我々の建築でも盲目的に行われて、（中略）紙上に美しく描かれたプロジェクトに終始し建物の実際の目的まで考慮されていない。（中略）例えばアルマ・アタの建築においてもモスクワやレニングラードのデザインがそのまま行われ気候的条件等が考慮されていない（筆者訳）」<sup>文献26)</sup>とし、同年の「ソ連の建築」誌上にて「ファサードの構成と高層住宅の壁の構造に何の関連性もなく、ロマネスク的な輪郭を持つ柱は壁の平面に接着されているようでファサード全体が『描かれ、貼られた』絵の平面でしかない（筆者訳）」と非難した<sup>文献27)</sup>。

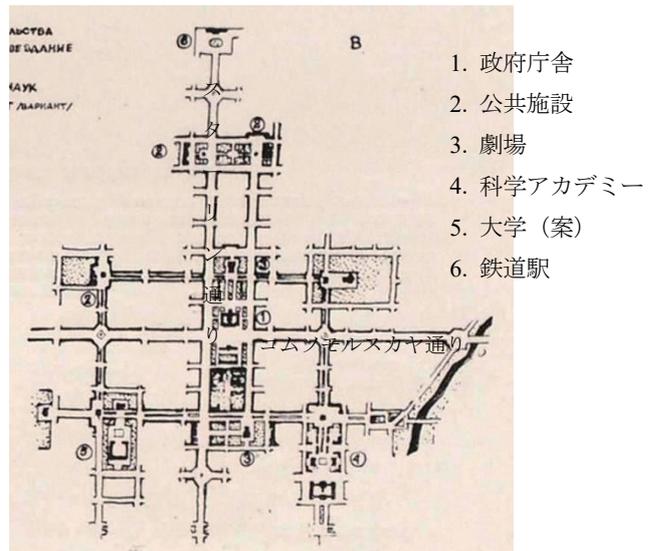
1947年は十月革命30周年に当たり、「ソ連の建築」1947年第17-18号にて「社会主義国家の建築」という記事が投稿され、「ソビエト建築の発展にとって非常に重要な肥やしとなるのは、形式的には民族的、内容的には社会主義的なスターリン主義の文化思想である。（中略）社会主義リアリズムの思想に基づき、民族建築の先進的な伝統を利用した新しい建築イメージの探求はソビエト全共和国の建築創造性に満ちている。ソビエト建築は多国籍国家の建築である。（中略）ソ連の人々の建築的創造性の豊かさと多様性は現代資本主義世界の無個性

な建築とは対照的である（筆者訳）」<sup>文献28)</sup>と謳われた。

### 3. 第四次五カ年計画（1946-1950）におけるアルマ・アタの都市計画と建築について

#### 3.1 戦後の都市計画について

「ソ連の建築」1947年15号に「ソビエト建築の都市計画の基礎」というタイトルで論考が発表され、「各建物は自己完結型ではなく都市において広大で複雑な有機体の細胞として考慮され扱われるべきである（筆者訳）」とし、戦前戦後に出版されたフランク・ロイド・ライトやルイス・セルト、エリエル・サーリネンの都市に関する著作を取り上げ、「資本主義社会の都市は深刻な危機に陥っている。（中略）スターリンはかつて都市の必要性を古典的に明確に正当化し、都市が人間の居住の最も経済的な形態であることを指摘した。（中略）都市は生物であり、その組織において『中心地』は公共生活の中心であり、公共建築物や行政機関の所在地であり、公的イベントやデモの場所でもあり、中央広場やアンサンブルはモニュメンタルな雰囲気醸し出し重要な役割を果たす（筆者訳）」とされた<sup>文献29)</sup>。



(図1) 中心地区の開発計画<sup>出典1)</sup>

大祖国戦争終了後の1945年、カザフスタン閣僚評議会にて「カザフスタンの地域センターのための計画プロジェクトの草案」が決定され、第四次五カ年計画における経済復興と発展・首都再建のためレンギプロゴールの建築家D.バラギン、B.ペロツェルコフスキー、L.ベトロウソフによってアルマ・アタの一般計画が1949年から1950年にかけて作成され評議会において承認された<sup>文献30)</sup>。この計画においては1936年のA.レプキンとI.グレビッチの計画を踏襲し、都市の自然・気候・歴史的条件を保持しつつ<sup>文献31)</sup>新たにレーニン通りの拡張などが計画された<sup>文献32)</sup>。また中心軸となるコムソモルスカヤ通りと新た

な中心広場の将来のあり方を考慮して再計画が行われた(図1)。

### 3.2 第四次五カ年計画初頭の公共建築

1936年に建設されていた映画館「アラタウ」はバレエ・オペラ劇場の設計者でもあったプロスタコフによって改修設計が行われ「少年観客劇場」(写真1)として1945年に完成した<sup>文献33)</sup>。構成主義的な建築であったがカザフスタンの伝統装飾等を用いた様式へと変更がなされた。中央部に浅い尖頭アーチのポルティコ、その両サイドに緩い尖頭アーチのニッチ等が取り付けられ、カザフスタンで初めて尖頭アーチのポルティコが建設された。



(写真1) 少年観客劇場, 1945年<sup>出典2)</sup>

1946年から1947年にかけてカザフスタン科学アカデミー建築学科が設立されたが、アカデミーにおいてカザフスタンの伝統建築・装飾の研究が行われ出版されたことにより建築家はそれを活用し伝統様式・装飾の使用が大きく普及していった<sup>文献34)</sup>。また公共建築の外観においては「民俗装飾を施すこと」が建設の条件となった<sup>文献35)</sup>。

### 3.3 第四次五カ年計画の住宅建築

第四次五カ年計画において戦前の1.5倍の住居施設の建設が予定され<sup>文献36)</sup>、1948年に大量建設のための建築ディテールの工業化と類型化を目的として、アルマ・アタ市プロジェクトにより建築細部アルバム<sup>3)</sup>の創刊号(図2)が作成された<sup>文献37)</sup>。

第四次五カ年計画の決定に従い大量建設に伴う住宅設計の標準化が推進され、1947年以降にウズベキスタンの設計機関ウズゴスプロジェクトによってトルクメニスタン共和国の地震帯用に開発されたNo.264シリーズを基に、1949年カズゴスプロジェクトのB.ステーションによってレンガ造の2階建て264-Aシリーズが、1950年から51年にかけてカズゴスプロジェクトのA.レピックにより2,3階建てのNo.261シリーズ(図3, 写真2)等が開発されアルマ・アタや他の都市にも普及していった<sup>文献38)</sup>。レピックは住宅建築に民族性を反映させるために石膏やコンクリートで鑄造されたカザフスタンの装飾のディテールを

はめ込むという手法を開発した<sup>文献39)</sup>。また気候性を考慮したロジgiaも設けられた。



(図2) 建築細部アルバムの一部<sup>出典3)</sup>



(図3) No.261シリーズ<sup>出典4)</sup>



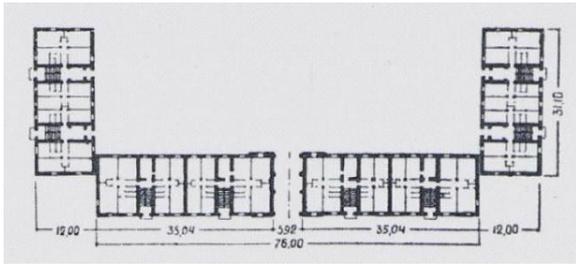
(写真2) 二階建てNo.261シリーズ(筆者撮影)

市中心部の3~4階建ての建物の計画において重要な交差点に面する部分は5階建ての建設が許可され<sup>文献40)</sup>、スターリン通りを中心に3~5階建ての集合住宅が建設されていったが、中心部においては標準設計ではなく個々の建築家による住宅設計が行われた<sup>文献41)</sup>。

1947年にG.ボボビッチの設計によって中心地から少し離れたコスモナフト通り沿いにキロフ工場従業員用の住宅(写真3)が建設された。平面構成(図4)においては1938年に建設されたスタハノフの家に近いが、中庭への通路は中央部分は三層分の吹き抜け石積みアーチとなっており、モニュメンタルなゲートが表現された。



(写真3) 工場従業員用の集合住宅, 1947年<sup>出典5)</sup>



(図4) 工場従業員用の住宅一階平面図<sup>出典6)</sup>

1950年にS.シェプイレフ、N.プロスタコフの設計によってコムソモルスカヤ通りとミラ通りの交差点に住宅団地No.9(写真4)が建設されたが、平面図(図5)においてL字型の構成で、南側の部分のブロックが交互に配置されている。南東西側端部の角が削られアルマ・アタの住宅建築では初めての例であるが、カザフスタンの建築家M.メンディクロフは「民族的装飾は独立した形でしか適用されず、建築全体との関連性は乏しく折衷様式である」<sup>文献42)</sup>と批判した。

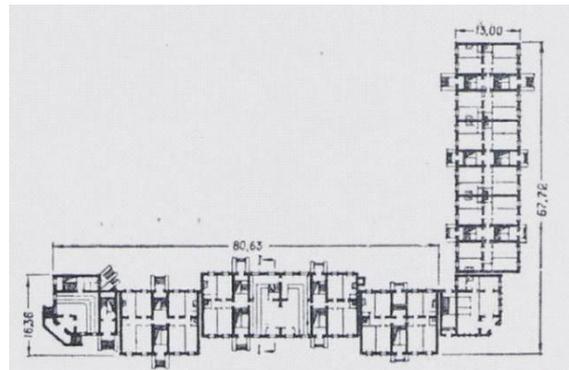
1951年にキロフ工場従業員用の住宅の外側北東部分に新たな住宅(写真5)が同じくボボビッチの設計によって建設されたが、L字型平面の角部が削られ3階部分に簡略化されたオーダーとブローケンペディメントが取り付けられており、写真からではあるが角部や階段室が突き出し、石積みの表現が施されている。

1952年には同じくボボビッチの設計によって街区東側に新たにキロフ工場従業員用の住宅(写真6)が建設されたが、先の建物と比較してカザフの伝統装飾や角ばった尖頭アーチのロジヤが取り入れられ、基壇部分も高くなりルスティカの表現が導入された。平面図(図6)においては二部屋と三部屋の変則的な構成で<sup>文献43)</sup>、両端部のみ突き出しており、隅石の表現が施されている。

これらの住宅は前述の一般計画に基づいて行われ、街区の人口密度は1ha当たり110人、建築密度は10%の設定に基づいており<sup>文献44)</sup>、住宅街区計画(図7)において南北線を軸にシンメトリーで構成され、アルマ・アタで初めて住宅街区におけるアンサンブルが実現された。



(写真4) 住宅団地No.9, 1950年<sup>出典7)</sup>



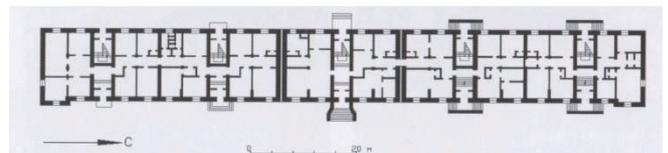
(図5) 住宅団地No.9一階平面図<sup>出典8)</sup>



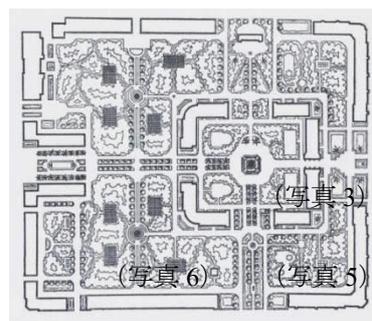
(写真5) 工場従業員用の住宅, 1951年(筆者撮影)



(写真6) 工場従業員用の住宅, 1952年<sup>出典9)</sup>



(図6) 工場従業員用の住宅一階平面図<sup>出典10)</sup>



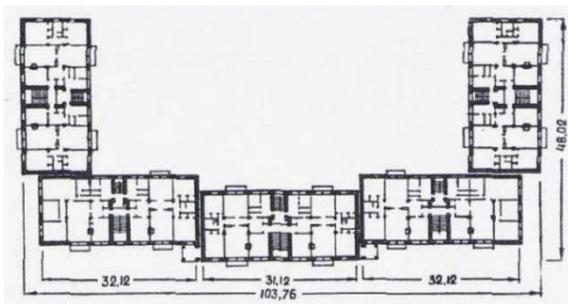
(図7) 住宅街区計画<sup>出典11)</sup> (図版右側が北)

1951年にG.ボボビッチの設計によってゴーリキー通

りに科学者の家（写真7）が建設された。尖頭アーチや装飾など様々な伝統様式が取り入れられた建築だが、メンディクローフは「この尖頭アーチはカザフスタンの民族建築の特徴ではなくインド建築のキールアーチに類似している（筆者訳）」<sup>文献45)</sup>と批判し、サモイロフは「民族のイメージに対する表面的な態度（筆者訳）」と分析した<sup>文献46)</sup>。平面図（図8）において中央部分のブロックは前面に押し出され両サイドよりも高く設計され、よりモニュメンタリティーが強調されている。



（写真7）科学者の家，1951年（筆者撮影）



（図8）科学者の家二階平面図<sup>出典12)</sup>

### 3.4 第四次五カ年計画の公共建築

1939年に建設されていた治療クリニックの近くに外科用の建物とポリクリニックが戦後に建設され医学研究所を含むエリアが病院街として形成され、工場などに対して診療を行う病院がその地域に建設されていった<sup>文献47)</sup>。その中で最も巨大な病院施設がM.クドゥリャツェフの設計によって1950年に建設されたトルキスタン・シベリア鉄道従業員の病院（写真8, 9）で、病院街から離れた南側のアバイ通りに建設された。平面図（図9）において東西に細長く病室は南側に配置され、治療クリニックとの類似性が見られる。建物正面部分にはポルティコが設けられ、尖頭アーチやペシュタク・イーワーン等の伝統様式が取り入れられており、その奥の壁には伝統的な装飾が用いられた。

1952年にゴーゴル通り沿いにワイナリーの管理棟がM.ヴァットの設計によって建設されたが、当初の案（図10）は中央アジアのモスクの形式を無批判に借用しているとしてメンディクローフから批判を受け<sup>文献48)</sup>、自身も設

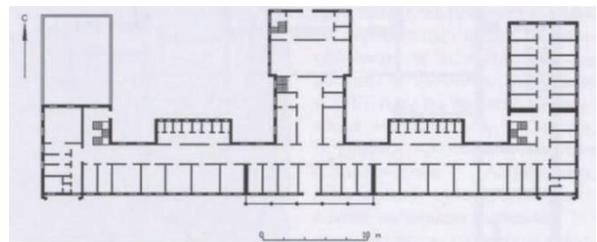
計に加わり、簡略化されたペシュタクのシステムを取り入れた第二案が実現された（図11）。



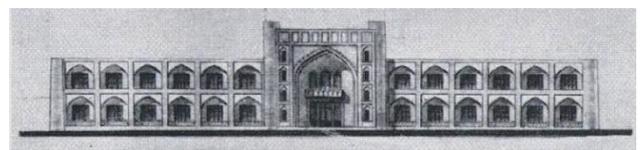
（写真8）鉄道従業員の病院，1950年（筆者撮影）



（写真9）鉄道従業員の病院，1950年<sup>出典13)</sup>



（図9）鉄道の従業員の病院平面図<sup>出典14)</sup>



（図10）ワイナリーの管理棟第一案<sup>出典15)</sup>



（図11）ワイナリーの管理棟第二実現案<sup>出典16)</sup>

## 4. 第五次五カ年計画（1951-1955）の政治・建築界の状況

1952年10月モスクワにて第19回 CPSU 党大会が大祖国戦争後初めて開催され、1951年から1955年までのソ連の第五次五カ年開発計画に関する決議が行われ、「産業分野において五年間で工業生産レベルを約70%増加」

が目標とされ<sup>文献49)</sup>、「国民経済の増大する需要に応えるため、5年間で基礎建築資材の生産を少なくとも二倍に増加、建設のさらなる工業化、コストの削減、建築、建設および運用の品質の向上」<sup>文献50)</sup>などが決定された。人々の物質的幸福や医療、文化レベルのさらなる成長のため<sup>文献51)</sup>「勤労者の生活環境を一層改善するため、あらゆる方法で住宅建設を拡大、五ヵ年計画に公共住宅建設の広範な計画を盛り込み、(中略)病院、保育園、幼稚園のネットワークを拡大、(中略)映画館のネットワークを拡大、医療、教育、科学および文化機関の計画的発展に従って資本投資の量を5年間で前の5年間と比較して約50%増加」<sup>文献52)</sup>が決定された。

「ソ連の建築」1952年第12号にソ連建築アカデミー会員のM.ルジャニンによる「ソビエト建築における古典遺産の発展について」という論考が掲載された。ルジャニンは「真の革新と過去の文化のあらゆる価値あるものを創造的に利用することの組み合わせは、文化と遺産に関するレーニンとスターリンの教えから生まれた最も重要な命題の一つである。(中略)他の芸術と同様に建築における遺産の重要な発展はレーニンの二つの文化の教義に基づいている。(中略)民族の建築遺産に対する無批判な態度は(中略)ソビエト建築とは異質な民族主義的形式主義につながる可能性がある(筆者訳)」<sup>文献53)</sup>と強く主張し、「ソ連諸国民の建築遺産という共通の宝庫において、偉大なロシア民族の遺産は、特別で統一的な肥沃な役割を果たしている。(中略)ロシア文化の主導的な役割はソ連の他の民族の国民文化の成果の役割を下げるものではなく、それどころかソ連国民の民族文化発展の実践全体はこの発展が平等な友愛的相互援助と文化的価値観の相互交換によって起こることを示している」<sup>文献54)</sup>と主張し、「ソ連の建築」1953年第3号にてルジャニンはA.シューセフによるトビリシのマルクス・エンゲルス・レーニン研究所、モスクワの全ソ連農業博覧会でのグルジアのパビリオン、エレバンのオペラ・バレエ劇場とアルメニアの政府庁舎、農業博覧会でのアゼルバイジャンのパビリオンとバクーのスターリン博物館、シューセフによるタシケントのナヴォイ劇場を取り上げ、「先進的なソビエト建築における民族的形態は、過去の時代の様式から折衷的に借用された形態や装飾によって建物の箱の『装飾』として外部から導入されるのではなく、建築家のイデオロギー的・芸術的概念に基づいて建物の内容やイメージから有機的に生み出されることが理解できる。遺産を創造的に利用する事のみが民族的な形でイメージを明らかにするのに役立つのである(筆者訳)」<sup>文献55)</sup>とし、「我々の科学の課題は遺産の真の進歩的な本質を明らかにし、それによってソビエト建築におけるその最良の側面の批判的な使用を促進すること(筆者訳)」<sup>文献56)</sup>としてレーニンの「二つの文化」の教義に基づいて

発展させるよう強く主張した。

## 5. 第五次五カ年計画(1951-1955)におけるアルマ・アタの都市計画と建築について

メンディクロフは1950年に刊行されたスターリンの著書「マルクス主義と言語学の諸問題」を引用し、「スターリンは『文化はその内容において社会発展の新たな時期ごとに変化する』と解いた(筆者訳)」<sup>文献57)</sup>として過去の遺産の無批判な使用を批判し、「ソ連建築の膨大な創造的経験、民族建築の遺産、民俗装飾芸術のモチーフを広く活用することが必要である。(中略)カザフ民族の新しい様式の建築デザインを創造するという課題は、ロシア古典建築のオーダーシステムとの有機的な組み合わせに基づいてこれらの形式を作り直すことによって解決されなければならない(筆者訳)」<sup>文献58)</sup>と主張し、カザフスタンの建築における今後の方向性が謳われた。

### 5.1 第五次五カ年計画の住宅建築

モルダヴィノフは前述の1944年の著書で「美しい都市は高層建築無しには成立せず、レニングラードの尖塔やドーム、鐘楼など高層建築は都市の壮大さと美しさを生み出してきた。(中略)ロンドンやパリ、ワシントンでも同様でシルエットのない高層建築物がない都市は表現力にかけ単調である(筆者訳)」<sup>文献59)</sup>と主張し、大祖国戦争後の偉業を建築によって示す必要性により1940年代後半から50年代前半にかけてモスクワなどソ連の大都市にて尖塔様式の高層ビルが建設されていった。



(写真10) 鉄道の労働者の住宅, 1953年 出典17)



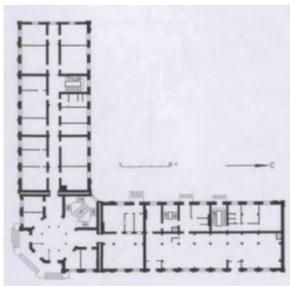
(写真11) 鉄道の労働者の住宅, 1953年 (筆者撮影)

カザフスタンにおいても伝統装飾を取り入れた尖塔様式の建物が同様に建設され、住宅団地 No.1 の南側に M. イルチェンコの設計によって 1953 年に建設されたトルキスタン・シベリア鉄道の労働者の住宅（写真 10）においては、交差点に面した建物の角部の 5 階建ての部分の頭頂に尖塔が設置され、裏庭への通路部分に尖頭アーチが取り入れられており、後述の共産党中央委員会の住宅と同様に連装アーチ窓が取り付けられている（写真 11）。

同年コムソモルスカヤ通りとパンフィロフ通りの交差点に B.ステシンの設計によってカザフスタン消費者組合管理棟（写真 12）が建設され、2 階以上の部分が住宅となっているが、平面計画（図 12）において両棟も交差点に面した部分の L 字形の角部に、5 階建ての八角形の建物の頭頂に尖塔が設けられている。



（写真 12）消費者組合管理棟，1953 年（筆者撮影）



（図 12）消費者組合の管理棟平面図<sup>出典 18</sup>



（写真 13）共産党中央委員会の住宅，1954 年（筆者撮影）

A.レピックの設計によりスターリン通り沿いの行政地区に共産党中央委員会の労働者の住宅（写真 13）が 1954 年に建設された。平滑な壁に三連装アーチ窓やバルコニー、ジャイアントオーダーの付け柱、窓周りや尖頭アー

チにカザフの伝統装飾が取り付けられた建築である。

## 5.2 第五次五カ年計画の公共建築

### 5.2.1 文化の家建築

1950 年 5 月共産党中央委員会によって農業の更なる発展と政治的および教育的活動の強化、集団農民の物質的および文化的レベルを向上が決定され<sup>文献 60</sup>、前述の第五カ年計画中に映画館や文化機関の増設が決定された。標準設計による文化の家とは別に個々のプロジェクトも建設され<sup>文献 61</sup>、アルマ・アタの郊外マラヤ・スタニツァに D.メルニコフの設計によって 1952 年に建設された集団農場の文化の家「東方の光線」<sup>文献 62</sup>（写真 14）やタバコ農場の文化の家（写真 15）など気候性や民族建築の特徴を取り入れた建築が建設されていった<sup>文献 63</sup>。

1953 年にキロフ通りにカズプロム評議会文化の家（写真 16）が T.ブレネルの設計により<sup>文献 64</sup>、中庭を三方の建築で囲む形式で建設され、正面と両側のポーチにペシユタク的な表現が施されている。



（写真 14）集団農場の文化の家<sup>出典 19</sup>



（写真 15）タバコ農場の文化の家<sup>出典 20</sup>



（写真 16）評議会文化の家，1953 年（筆者撮影）

### 5.2.2 第五次五カ年計画の高等教育機関の建築

経済と文化の分野の問題の解決において科学者と教育者の補充の必要性から 1947 年 7 月共産党中央委員会によ

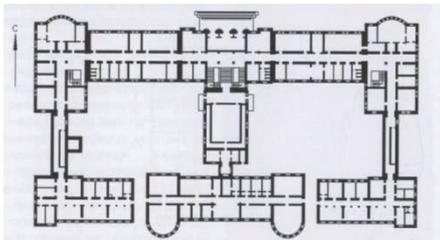
り「大学院課程を通じた科学的・教育学的人材の養成について」が決定され<sup>文献65)</sup>、1920年代後半から30年代中期にかけて既に高等教育機関が建設されていたが、これを機に新たに増築、建設されていった。



(写真17) 農業研究所, 1954年<sup>出典21)</sup>



(写真18) 獣医学研究所, 1954年(筆者撮影)



(図13) 獣医学研究所平面図<sup>出典22)</sup>



(写真19) 女性教育学研究所, 1954年<sup>出典23)</sup>

1934年に既にアバイ通り南側に建設されていた農業研究所はV.ビリュコフの設計によって建物の中央部分と右側部分が1954年に(写真17), 1928年に既に建設されていた獣医学研究所は同じくビリュコフの設計により

1954年に増築された(写真18)<sup>文献66)</sup>。平面図(図13)においては三軸で構成され北側前面両端部と南側後部に半円形が用いられている。

1932年にゴーゴル通りにカザフスタンにおいて大学として初めて開設された女性教育学研究所は、同じゴーゴル通り東側に場所を移して1954年にビリュコフの設計によって建設された(写真19)。

これら三棟においては伝統建築のペシュタクとイーワーンの要素が導入され、これまでの古典様式のオーダーと比較して各々異なった独特のデザインが用いられた。

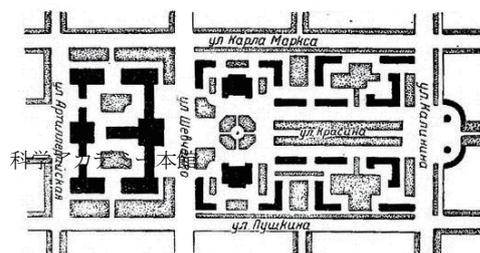
### 5.2.3 第五次五カ年計画の科学アカデミー

1938年にM.シュガルの設計によって市の中心部に2階建ての科学アカデミーが建設されていたが、大祖国戦争により多くの研究機関がアルマ・アタに避難しており<sup>文献67)</sup>、それに伴い農業研究所から2ブロック北側のシェフチェンコ通りークラシン通りの交差点に当時モスクワの科学アカデミーの主任建築家であったA.シューセフとN.プロスタコフの設計によって新たな科学アカデミーが1948年から53年にかけて建設された(写真20)。

この建物は共和国の発展のための戦略的に重要な機関を含む主要な科学研究機関の中心地であり、このエリアは独自の学術街としてのアンサンブルが計画された<sup>文献68)</sup>(図14)。平面構成は三軸構造で、耐震性が考慮された6棟の建物で構成され、基礎はラーメン構造で壁も鉄筋コンクリートラーメン構造に充填レンガ、エントランスホール天井には薄肉コンクリートシェル構造が用いられた<sup>文献69)</sup>。

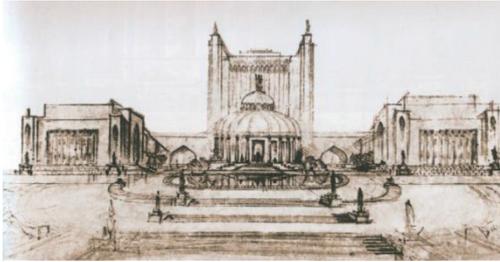


(写真20) 科学アカデミー, 1953年<sup>出典24)</sup>



(図14) 科学アカデミーアンサンブル<sup>出典25)</sup>(右側が北)

1947年の初期案(図15)はシューセフによるもので、中央アジアの宗教建築の伝統様式が用いられていたが建物の規模が縮小され<sup>文献70)</sup>、変更案ではプロスタコフも参加し、中央アジアの伝統建築の要素である尖頭アーチ、ペシュタク、ミナレット、ドームが適用されていたが(図16)、最終案ではドーム等は撤廃された。その代わりに三層に渡るジャイアント・オーダーの付け柱やカザフの装飾パターンが取り入れられた。



(図15) 科学アカデミー初期案<sup>出典26)</sup>



(図16) 科学アカデミー変更案<sup>出典27)</sup>

メンディクロフは初期案に対し「ソビエトの科学施設というよりもむしろ宗教施設のマドラサのようで、このような建築は中央アジアのどこにあってもおかしくなく、カザフの伝統的装飾が施されていないため個性的ではない(筆者訳)」と非難したが、「最終案ではこれらの欠点が克服された(筆者訳)」と評した<sup>文献71)</sup>。

メンディクロフは「カザフスタンの社会主義建築の民族的特徴のさらなる発展は、ソ連人民の建築の膨大な創造的経験、民族建築の遺産、民族装飾芸術のモチーフを広範に活用しなくてはならない。民族建築の主な特徴の尖頭アーチ、多様な形態のドーム、門(ペシュタク)、壁上の空白面、造形的な煉瓦積み、陶器の被覆、石材、アラバスター、木彫の多用による独特の装飾デザインである。(中略)レーニンの『全ての民族文化には二つの文化がある』という教義に従い民俗的建築の研究を進めるべきで、現代では建築のイデオロギー変化と共にこれらの伝統的な形式を創造的な修正なしに使用することはできない(筆者訳)」<sup>文献72)</sup>としたが、これに対しモスクワの建築評論家V.L.ヴォロニーナはメンディクロフの主張に同意しながら「民族的建築の手法は主にファサードに適用され、平面計画や全体の構成においては殆ど考慮

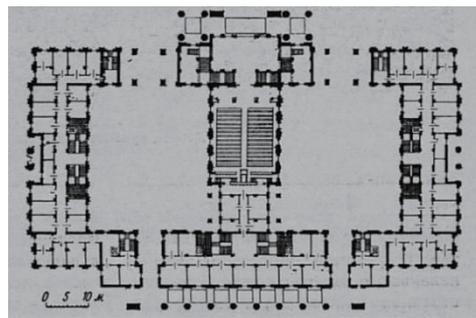
されておらず、民族的形態に取り組む際に古典的なオーダーに民俗装飾を取り入れることは折衷的であり、それを第一として民族的形態を二の次とすることは間違いである(筆者訳)」と批判し、民俗装飾芸術についても「中央アジアの兄弟民族が発展させた民俗住居の形式、とりわけウズベク住居の形式を利用することも問題提起すべき(筆者訳)」と主張した<sup>文献73)</sup>。マリノフスカヤは「当時カザフスタンの建築家の民俗遺産への知識は不足しており中央アジアの遺産に頼った(筆者訳)」<sup>文献74)</sup>とした。

#### 5.2.4 第五次五カ年計画の政府庁舎と都市計画

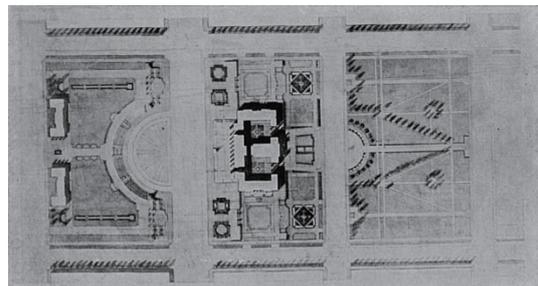
新たな政府庁舎の計画は第二次五カ年計画開始の1933年に始まり、M.シュガルの競技案が1937年<sup>文献75)</sup>なので設計競技が行われたのは1937年の可能性が高いと考えられるが、その設計競技により当時レニングラードの設計機関レムプロエクトのB.ルバネンコとG.シモノフ<sup>文献76)</sup>の案(図17)が選ばれたが、この提案に対してレニングラードの建築家D.クリチェフスキーはカザフの民族的モチーフが効果的に適用されていないと懸念を示した<sup>文献77)</sup>。設計競技は1937年の第一回全ソ連建築家同盟総会前後と思われるが、壮大な記念碑性が求められていたと考えられる。



(図17) アルマ・アタの政府宮殿案<sup>出典28)</sup>



(図18) 三階平面図<sup>出典29)</sup>



(図19) 一般計画<sup>出典30)</sup> (右側が北)

中庭を配した三軸構成(図18)で、中庭部分のパスではセルリアーナが用いられており<sup>文献78)</sup>、風が貫通する外部からアクセス可能な通路が設けられており、建物角部の部屋で通路をふさがないように廊下を開口部まで伸ばしており、地域の気候性が考慮された<sup>文献79)</sup>。

1937年の案で円形広場(図19)が政府庁舎の南北側に計画され、本稿の3.1で述べたバラギンらによる楕円形の中央広場のアンサンブル計画(図20)にも反映された。

1948年にI.レヴィンソン、M.シュガル、I.スマロコワによって建物の北側部分の計画が行われ<sup>文献80)</sup>、1952年にはスターリン通り北側端部の鉄道駅広場の再建計画(図1)が同じくレヴィンソンらによって行われた<sup>文献81)</sup>。鉄道駅には尖塔が取り付けられ、シューセフの設計により1940年に完成したモスクワのカザンスキー駅のデザインが反映され<sup>文献82)</sup>、円形広場の周りの建物は中央広場と同様にバロック的な構成となっている。



(図20) 中央広場計画<sup>出典31)</sup>



(図21) カザフスタン政府庁舎途中案<sup>出典32)</sup>

政府庁舎の途中案(図21)でドームや中庭、噴水、尖頭アーチを設けた計画に対し、メンディクロフは「民族建築の伝統を生かそうとする設計者の姿勢が見える。(中略)ロシア古典建築の技法と形式、民族建築の進歩的要素の統合に基づいている(筆者訳)」と評価した<sup>文献83)</sup>。

戦争により建物の建設が延期されていたが1951年に開始され<sup>文献84)</sup>、ドームや彫刻などは当時の建築の「過剰」に対する政策に従って最終的には適用されず<sup>文献85)</sup>、フルシチョフ就任後の1957年に完成した(写真21)。

構造は鉄筋コンクリートフレーム構造に多孔質のレン

ガが用いられ<sup>文献86)</sup>、ポルティコのフリーズ部分には角ばった尖頭アーチというよりは伝統住居のユルタの形状に近い彫り込みが適用されている。ポルティコの多角形ジャイアント・オーダー同様建物のサイド部分にも角柱付け柱のジャイアント・オーダーが適用され、ポルティコの列柱を含め垂直的な構成であった。



(写真21) カザフスタン政府庁舎、1957年(筆者撮影)

## 6. まとめと今後の研究課題

### 6.1 まとめ

1940年モスクワとレニングラードの建築家による創造的会議において建築遺産の創造的な習得、バロック建築的なものへの移行、レニングラードにおけるベーレンス主義への批判、ルネッサンスの宮殿的な建築への批判、ブルネレスキへの称賛、他国の歴史的遺産からの無批判的な借用に対する非難等が行われ、「革新と伝統」の弁証法的統一の必要性が謳われた。

大祖国戦争からの復興のため、1943年末にソ連人民委員評議会の下に建築問題委員会が設立され、委員長に就任したモルドヴィノフにより自身の著書において戦後のソ連の建築における目標が示された。その中で各民族の芸術や記念碑的建築の適用が強く謳われ、アルマ・アタに建設されていた構成主義的な建築であった映画館は伝統様式が取り入れられた少年劇場へと改修された。

1946年の共産党による「ドラマ劇場のレパートリーとその改善策について」、1948年の「V・ムラデリのオペラ『偉大なる友情』について」の決議や、1947年の十月革命30周年記念に従い、各共和国の伝統的な民族芸術をさらに発展させていくことが謳われた。

「ソ連の建築」1947年第15号にて都市中心部の建築によるアンサンブルが言及され、同誌上で資本主義国家の都市計画が批判され、建築は単体でなく都市における有機体として計画され、その中心部は記念碑的な空間として機能するべきと主張された。これらの主張を受けアルマ・アタの一般計画が1950年に作成されると新たな中心地の再計画が提案され、中心地とその交差する軸線を中心に各施設や広場・公園のネットワークが計画された。

第四次五カ年計画の決定を受け1949年に標準設計による住宅建築の開発が推進され、民族装飾や地域性を反映した住宅が開発された。キロフ工場従業員用の住宅街

区も従来と異なりシンメトリーに配置され、モニュメンタルなアンサンブル形式が適用され中庭も整備されていたが、1940年の創造的会議でのルバネンコによるモスクワの中庭空間への非難を受けて、1940年にモスクワの設計機関ゴールストロイプロジェクト等により児童施設の配置や緑地・運動場計画、人口密度等を含めた住宅街区の実験プロジェクトが数案開発され<sup>文献87)</sup>、その一つが参照されたと考えられる。

住宅の建築様式に関して、1947年のキロフ工場従業員用の住宅はまだ古典様式であり、十月革命30周年記念にあたる1947年以降に建設された1951年のキロフ工場従業員用の住宅は3階部分にパツラディオのヴィツラ・バルバロの中央ファサード部分が引用されたと考えられ、1947年にアラビヤンが批判したルネッサンス建築の要素の機械的な貼り付けがまだ行われていたが、1950年の住宅団地No.9には折衷様式とメンディクロフからは批判されたが伝統的な装飾が、1952年のキロフ工場従業員用の住宅には伝統的な装飾と気候性に応じた尖頭アーチのロτζィア、ルネッサンス様式の隅石やルスティカ的な基壇が取り入れられた。これらの建築はブロック交互の配置や階段室・建物端部の突き出しが表現されたが、「ソ連の建築」1940年第9号にて国内や外国の例を挙げ住宅建築の凹みの有効性に関する考察が行われ<sup>文献88)</sup>、それを受けて外壁の平滑性を避け都市空間に対して立体的に表現するためだと考えられる。また1951年の科学者の家(写真7)においてはパツラディオのパラツォ・キエリカーティのように両端部をテラスとして適用し開口部を設け二層に渡る尖頭アーチとし、3階部分には二連装尖頭アーチ窓を用いている。1階部分の尖頭アーチや窓部分が二連装と単装の繰り返しとなっており、メンディクロフらは民族様式とは異なるとの見解であったが、これはパラツォ・ドゥカーレや15世紀のヴェネツィアの邸宅が参照されているものと考えられ、ルネッサンス様式と民族装飾の統合が試みられ、「壁」上の構成がより複合化していった。

また第五次五カ年計画に入り、1944年のモルドヴィノフの主張を受け、1953年のトルキスタン・シベリア鉄道労働者の住宅や消費者組合管理棟は尖塔様式で建設されたが、鉄道労働者の住宅の「壁」においてはパツラディオのパラツォ建築のように一層目を基壇として二から三層目にかけてジャイアントオーダーの付け柱が取り付けられ、窓部分においては前述のようにヴェネツィアのカメルレンギ宮殿や16世紀の住宅の連装窓が参照されたと考えられ、その周囲にカザフの伝統装飾を貼り付けている。消費者組合管理棟においては一層目の腰壁を基壇として三層にわたるジャイアントオーダーの付け柱が取り付けられているが、これは後に建設される隣接する政府庁舎の外壁の構成との調和が図られたと考えられ

る。尖塔に関しては、1940年の創造的会議でのピリンキンの主張や、高層ビルは資本主義社会の高層建築と似てはいけないという共産党の指示に基づいて<sup>文献89)</sup>、両棟ともブルネレスキのサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のクーポラ部分や洗礼堂の平面形状が参照されたのではないかと考えられる。

1952年のルジャニンによる論考でレーニンの教義「二つの文化」に基づき過去の様式や民族遺産を批判的に発展させることが強く謳われ、1954年の共産党中央委員会の住宅の「壁」において三層に渡る厚みのあるジャイアントオーダーの付け柱はパツラディオのパラツォ・ヴァルマラーナ、四層目部分のバルコニーはセルリアーナを立体化したもの、ヴェネツィアのカメルレンギ宮殿や16世紀のパラツォ建築の連装窓などを参照したものと考えられ、「壁」上の構成要素がカザフの伝統装飾と融合しバロック的な立体化が行われた。

これらの住宅建築に関して、「壁」上にはルネッサンス建築の要素と伝統装飾を適用しながら、隅石やルスティカ等のルネッサンス建築の構成要素とロτζィアや尖頭アーチなどの伝統様式の統合に発展し、1940年にコルンフェルドが建築雑誌で主張したように、レニングラードの「フレーム」派の特徴でもあるジャイアントオーダーの付け柱を「壁」上に取り付けていき、尖頭アーチや民族装飾などの伝統要素と統合しながら折衷様式に近い形でレーニンの「二つの文化」は形成されていった。

1940年の創造的会議でのヴェスニンの発言における遺産に対しての批判的・創造的習得の必要性や「ソ連の建築」1940年のコルンフェルドの論考における「革新と伝統」の弁証法的統一の必要性を受けて、1950年のトルキスタン・シベリア鉄道従業員の病院において、後期ルネッサンス建築のファサードにおける重ね合わせをレイヤー別に分け、ポルティコの列柱部分にはパツラディオが多用したセルリアーナのアーチを尖頭形にし柱頭をアーチより上部に移動させて柱頭を連結させる事により、伝統様式であるペシュタクのシステムを反転して表現し、もう一つの下側のレイヤー上の方形の装飾部分を裏側の壁上に伝統紋様に変換して取り付けられており、従来の装飾的な様式とは異なる新たな手法が確立された。

第五次五カ年計画に突入し、前述の1952年のルジャニンによるレーニンの教義「二つの文化」に基づき、公共建築においては、ロシア古典様式の「フレーム」を基に民俗装飾や尖頭アーチだけでなく、宗教建築の特徴であるペシュタクやイーワーンを導入した建築も建設されていくようになった。

文化の家について、1952年の文化の家「東方の光線」においてはペディメントの彫り込みに簡略的なマニエリスティックな操作が行われ、直線的な尖頭アーチの列柱が用いられ直接的な引用であったが、タバコ農場文化の

家においてはペシュタクや円型アーチのイーワーンと伝統的な装飾が用いられ、1953年の評議会文化の家においてはレニングラードのパッラーディオ古典主義のアレクサンドルフスキー宮殿が参照されたのではないかと考えられ、ポーチ部分にペシュタク的な表現が用いられたが、複雑な変換手法は取られず折衷的な様式であった。

高等教育機関の建築については、1954年の農業研究所においてシューセフのナヴォイ劇場のポルティコが参照されたと考えられるが、ミラノのブレラ美術館のようにセルリオの「ヴェネツィア風窓」の柱間の距離を詰めて二層に渡る異形ジャイアントオーダーを尖頭アーチで連結し、奥の壁にはポルティコ前面の尖頭アーチと同じ大きさで「ヴェネツィア風窓」、2階部分にはナヴォイ劇場の1階部分のドアを参照したと考えられるが柱を窓開口部に挿入し、セルリアーナの平面的な重ね合わせを二つのレイヤーに分解している。

獣医学研究所においてはポルティコの奥行きは浅くレイヤーはそれほど分解されず、二層に渡る異形のジャイアントオーダーの付柱に角ばった尖頭アーチを設け、三層目のイーワーン的な尖頭アーチ内に縦長アーチを縮小した二連装の窓を設け、その間に同様に縮小したオーダーを取り付け、ファサード内部自体において極めて自律的にマネジスティックな操作が行われている。

女性教育学研究所においてはバレー・オペラ劇場のポルティコが参照されたと考えられるが、一層目を基壇として二層に渡る異形ジャイアントオーダーに尖頭アーチが乗り、奥の壁には三層目に前面のアーチを縮小した二連装の窓が取り付けられている。

これらの三棟はトルキスタン・シベリア鉄道の病院において確立された手法を進化させ、ペシュタク内の「フレーム」に過去の遺産を批判的に引用しつつ、ルネッサンス建築の要素や伝統建築の様式が後期ルネッサンス建築の「壁」の解体やマネジスム的な手法によって弁証法的に統合され、革新的な「二つの文化」が実現された。

1953年に新たな科学アカデミーがモスクワのA.シューセフの設計によって建設され、初期案では伝統的な宗教建築的であったが最終案では変更され、三軸構成によるボリューム構成にペシュタクや装飾などの伝統的な要素やジャイアントオーダーの付け柱を取り入れた建築となった。マリノフスカヤは古典と東洋の技術の統合としたが<sup>文献90)</sup>、中心棟のボリューム構成にシューセフが設計に関わったホテル・モスクワとの関連性が見受けられ、エンパイア・ステートビル<sup>91)</sup>の頭頂部分などアメリカのアー・デコ建築の影響が考えられ、アー・デコのボリュームの「壁」に伝統的な要素やジャイアントオーダーの付け柱が取り付けられた構成であった。

1950年のマスタープランにより中央広場が再計画され、以前から計画されていた記念碑的な円形中央広場は、

1940年の創造的会議のイルインの発言におけるルネッサンスからバロック的空間への進化を受け、楕円形のバロック的な構成へと移行した。楕円形の中央広場の列柱回廊はレニングラードのバロック的なカザン大聖堂が参照されたと考えられるが、これは前述のモルダヴィノフの「ロシアやウクライナの都市計画や建築を探求」を受けて参照されたとされる。

1937年の新たな政府庁舎コンペ案ではカザフの伝統的な装飾が施されていないが、その後の案ではコロンフェルドが言及したレニングラード派の「フレーム」の建築であるロシア古典様式にカザフの民族装飾が取り入れられた建築が実現された。

これら二棟の建築においては、中央の建築家によるロシア古典様式やアー・デコ建築にカザフの伝統的な要素や装飾が取り入れられた従来の折衷的な「二つの文化」の様式であった。

このように第四次・五次五カ年計画におけるアルマ・アタの建築において、民族遺産の批判的発展が謳われたが、折衷的な「二つの文化」と革新的な弁証法的統合が行われた「二つの文化」が形成された。

## 6.2 今後の研究課題

キロフ工場従業員用の住宅、科学者の家や共産党中央委員会の住宅、トルキスタン・シベリア鉄道労働者の住宅、消費者組合管理棟のファサードにおいてはパッラーディオの建築やセルリアーナ、パラッツォ建築の連装窓などイタリア・ルネッサンス建築の要素やブルネレスキの建築を参照したのではないかと考えられるが、1939年のM.マルクゾンによる論考「建築における暗喩と直喩」においてルネッサンス建築のオーダーの分析に基づき、過去から選択されたオーダーの暗喩における建築言語の可能性<sup>文献91)</sup>、1943年のA.プロフによる論考「新しいロシア建築への道」では「ルネッサンス派では、形が素材から、イメージが内容から、構造物が時代から引きはがされるのと同じ方法で引きはがされイメージと無限の間の超越的な繋がりのような役割を果たす(筆者訳)」<sup>文献92)</sup>など様々な分析が行われ、これらは後のR.ヴェンチャーリや磯崎新の「手法論」のポストモダニズムの概念に繋がっていくものと考えられるが、イコンニコフは1985年の著書「建築の芸術的言語」の中で「19世紀後半のロシア折衷主義建築においてその芸術的言語は記号の組み合わせに基づいており、その意味は過去の記号の使用に依存していた。(中略)回顧性は1930年代半ばから1950年代半ばまでの伝統主義と関連したソビエト建築の作品に含まれていた民族的アイデンティティのメタファーにも内在していた」<sup>文献93)</sup>とし、マリノフスカヤは「多様な文化による複雑なサンプルと遺産に関する知識不足が引用先の恣意的な選択と統合を引き起こした」<sup>文献94)</sup>とした

が、具体的にどのようなメタファーや批判的手法をもって前述の要素がこれらの建築のファサードに適用・引用されていたのか。

トルキスタン・シベリア鉄道従業員の病院や農業研究所、獣医学研究所、女性教育学研究所の前面ファサードに取り付けられたポルティコにおいて、過去の遺産や伝統様式の表現だけでなく、イタリア・ルネッサンス建築のファサード構成の要素をレイヤー別に解体し前面後面と二層に分けてマニエリスティックに表現されたのではないかと考えられるが、1938年のM.イルインによる論考「パツラーディオの遺産 18世紀後半のロシア建築」ではM.カザコーフらのロシア古典建築におけるパツラーディオの影響とその批判的展開の分析が行われ<sup>文献95)</sup>、1941年のB.ミハイロフによる「建築における形式と内容」において、折衷主義とは異なる、古典建築の構成原則の変形適用とそれらの統合<sup>文献96)</sup>、同じく1941年のI.アンティポフによる「ロシアの建築遺産と最新建築におけるその発展」において、ルネッサンスの巨匠らの厳格で論理的な建築の構築原則の重要性<sup>文献97)</sup>、1946年のG.ボリソフスキーによる論考「民俗芸術、古典オーダーと現代の基準」において「現代美術の枠組み内での芸術形式の安定化とその基準化という問題は民族芸術において説得力のある答えを得られる(筆者訳)」<sup>文献98)</sup>と主張されたが、これらの分析・論考がそれらの建築における設計手法にどのように反映されたのか。

科学アカデミーにおいてシュージェフは当初マドラサのような伝統的な建築を構想していたが、最終的には自身が設計に関与したホテル・モスクワと同様なボリューム構成にカザフの民俗装飾やペシユタク的な物をファサードに取り込んだデザインへと変更されたが、これにはシュージェフによる1940年の「民族的な装飾を地域の気候や生活スタイルにのっとった建物に取り込むべき(筆者訳)」<sup>文献99)</sup>という主張に基づいているのではないかと考えられる。古典様式や民族様式の無批判な使用は形式的と批判されたこともあり、アール・デコ様式に装飾を取り付ける手法を選択したと考えられる。また前述のヴォロニーナによるファサード主義に対する批判は装飾を取り込んだ折衷様式に対するものであり、なぜ民族建築の形態が批判的に用いられないのかという批判であったが、この件に関してシュージェフの建築的思想やモルドヴィノフの主張、ルジャニンの論考がメンディクロフを含めソ連の建築家に多大な影響を及ぼしたのではないかと考えられる。これらの考察に対して更なる検証が求められる。

また科学アカデミーや政府庁舎には鉄筋コンクリートフレーム構造やシェル構造が一部に適用されたが、前述のブロフによる「新しいロシア建築への道」では新しい構造形式は鉄筋コンクリートフレーム構造と強調され<sup>文献100)</sup>、1945年のギンズブルグによる論考「テクトニクス

と現代建築の問題」において外国のシェル構造や吊り構造の可能性、鉄骨・鉄筋コンクリートフレーム構造の可能性が新たな社会主義リアリズムに導くと主張が行われたが<sup>文献101)</sup>、構成主義時代にも提案・適用された構法がフルシチョフ時代へとどのように繋がっていったのか。

戦後のアルマ・アタの建築においてモスクワの「壁」派やレニングラードの「フレーム」派の建築がルネッサンス建築の要素とカザフの伝統要素がどのように統合され、レーニンの教義である「二つの文化」がどのように展開されていったのか、本稿においては二次資料による分析を試してみたが、オリジナルの図面を含む一次資料による更なる検証が必要である。

## 参考文献

- 1) 諸喜田真：カザフスタンのアルマトイ市の第一次・第二次五カ年計画におけるソビエト政権下の都市計画・建築様式に関する研究動向と課題：ソビエト・カザフスタンの一般建築史 その1, 九州大学大学院人間環境学研究院紀要第46号, 九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門, pp.39-40, 2024年7月
- 2) Малиновская Е.Г. : Памятник современной архитектуры, Алматы: ARK Gallery, p.167, April, 2018
- 3) Алабян К.С. : Творческие вопросы советской архитектуры: материалы творческой встречи архитекторов Москвы и Ленинграда (ソビエト建築の創造的問題: モスクワとレニングラードの建築家の創造的会議の資料), Государственное архитектурное издательство Академии архитектуры СССР, p.3, 1940
- 4) Ibid., p.16
- 5) Ibid., p.42
- 6) Ibid., p.56
- 7) Ibid., p.140
- 8) Ibid., p.141
- 9) Ibid., pp.80-81
- 10) Ibid., pp.104-105
- 11) Ibid., p.126
- 12) Ibid., p.150
- 13) Ibid., p.56
- 14) Архитектура СССР 1940 №.07, Стройиздат, pp.55-56, 1940
- 15) Архитектура СССР 1941 №.01, Стройиздат, p.32, 1941
- 16) Былинкин Н. П., Калмыкова В. Н., Рябушин А. В., Сергеева Г.В., : История советской архитектуры (1917-1954 гг.) (ソビエト建築の歴史 (1917-1954)), Стройиздат. p.175, 1985
- 17) Архитектура СССР 1944 №.05, Стройиздат, p.1, 1944
- 18) Мордвинов А. Г., : Художественные проблемы советской архитектуры (ソビエト建築の芸術的問題),

- Государственное Архитектурное Издательство, p.16, 1944
- 19) Ibid., p.1
- 20) Ibid., p.21
- 21) Ibid., p.21
- 22) Коммунистическая партия Советского Союза : Коммунистическая партия Советского Союза в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК (1898-1986) ТОМ ВОСЬМОЙ (ソ連共産党中央委員会の大会, 会議, プレナムの決議と決定 (1898-1986) 第8巻), Политиздат, p.17, 1985
- 23) Ibid., p.19
- 24) Ibid., p.22
- 25) Мендикулов М. М. : Архитектура города Алма-Аты (アルマ・アタ市の建築), Издательство Академии наук Казахской ССР, pp.40-41, 1953
- 26) Архитектура СССР 1947 №.14, Стройиздат, pp.1-4, 1947
- 27) Архитектура СССР 1947 №.16, Стройиздат, p.6, 1947
- 28) Архитектура СССР 1947 №.17-18, Стройиздат, p.5, 1947
- 29) Архитектура СССР 1947 №.15, Стройиздат, pp.1-2, 1947
- 30) Мендикулов М. М. : op.cit., p.56
- 31) Ibid., p.56
- 32) Капанов А. К., Баймагамбетов С. К. : Алматы: архитектура и градостроительство (アルマトイ : 建築と都市計画), DIDAR Publishing Co., p.144, 1998
- 33) Мендикулов М. М. : op.cit., p.69
- 34) Ibid., p.40
- 35) Малиновская Е. Г. : op.cit., p.104, April
- 36) Глаудинов Бекримжан : Развитие Архитектуры Казахстана в Эпоху Социализма (社会主義時代のカザフスタンにおける建築の発展), Казахской головной архитектурно-строительной академии, p.85, 2019
- 37) Басенов Т. К. : Орнамент Казахстана в архитектуре (建築におけるカザフスタンの装飾), Издательство Академии Наук Казахской ССР, p.81, 1957
- 38) Глаудинов Б. А., Сейдалинов М. Г., Карпыков А. С. : Архитектура Советского Казахстана (ソビエト・カザフスタンの建築), Стройиздат, p.83, April, 1987
- 39) Архитектура СССР 1954 №.1, Стройиздат, p.16, 1954
- 40) Глаудинов Б. : Архитектура Советского Казахстана, Стройиздат, p.19, 1974
- 41) Ibid., p.22
- 42) Мендикулов М. М. : op.cit., p.84
- 43) Нурпенсов М. М., Малиновская Е. Г.-Рюнтю, Проскурин В. Н. : СВОД памятников истории и культуры г.Алматы (年代記 アルマトイの歴史・文化的記念碑), Казак энциклопедиясы, p.257, 2006
- 44) Мендикулов М. М. : op.cit., pp.84-85
- 45) Ibid., p.84
- 46) Самойлов К. И. : Архитектура Казахстана XX века (Развитие архитектурно-художественных форм) (20世紀のカザフスタンの建築 (建築と芸術形式の発展)), М-АРИ, p.282, 2004
- 47) Глаудинов Б. А., Сейдалинов М. Г., Карпыков А. С. : op.cit., p.93
- 48) Мендикулов М. М. : op.cit., p.41
- 49) Коммунистическая партия Советского Союза : ТОМ ВОСЬМОЙ: op.cit., p.262
- 50) Ibid., p.269
- 51) Ibid., p.279
- 52) Ibid., pp.279-282
- 53) Архитектура СССР 1952 №.12, Стройиздат, pp.16-19, 1952
- 54) Ibid., p.19
- 55) Архитектура СССР 1953 №.3, Стройиздат, p.18, 1953
- 56) Ibid., p.19
- 57) Мендикулов М. М. : op.cit., p.41
- 58) Ibid., pp.89-90
- 59) Мордвинов А. Г. : op.cit., pp.26-27
- 60) Коммунистическая партия Советского Союза : ТОМ ВОСЬМОЙ: op.cit., p.214
- 61) Глаудинов Б. А., Сейдалинов М. Г., Карпыков А. С. : op.cit., p.100
- 62) Архитектура СССР 1952 №.9, Стройиздат, p.29, 1952
- 63) Глаудинов Б.А., Сейдалинов М.Г., Карпыков А.С. : op.cit., p.101
- 64) Самойлов К. И. : op.cit., p.254
- 65) Коммунистическая партия Советского Союза : ТОМ ВОСЬМОЙ: op.cit., p.147
- 66) Туякбаева Б. : Алматы Древний Средневековый колониальный советский этапы урбанизации (アルマトイ ソビエトの都市化段階 古代・中世 植民地時代), World Discovery, p.221, June, 2008
- 67) Глаудинов Б. : op.cit., p.19
- 68) Мендикулов М. М. : op.cit., pp.29-30
- 69) Ibid., p.74
- 70) Ауэзов Е. К., Чулакова Н. П., : Алматы. Архитектурные хроники (история создания уникальных зданий города) (アルマトイ 建築クロニコル (都市のユニークな建物の創造の歴史)), p.69, 2010
- 71) Мендикулов М. М. : op.cit., p.71
- 72) Ibid., p.89
- 73) Воронина В. Л. : Народные традиции архитектуры

- Узбекистана (ウズベキスタンの建築の民俗的伝統),  
Государственное издательство архитектуры и  
строительства, pp.159-160, 1951
- 74) Малиновская Е. Г. : op.cit., pp.150-151
- 75) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г. : op.cit., p.152
- 76) Архитектура СССР 1939 №.7, Стройиздат, p.19, 1939
- 77) Ibid., p.22
- 78) Ibid., p.20
- 79) Мендикулов М. М. : op.cit., p.75
- 80) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г. : op.cit., p.152
- 81) Ibid., p.152
- 82) Мендикулов М. М. : op.cit., p.46
- 83) Ibid., pp.76
- 84) Ibid., p.75
- 85) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г. : op.cit., p.208
- 86) Мендикулов М. М. : op.cit., p.76
- 87) Архитектура СССР 1940 №.9, Стройиздат, p.10, 1940
- 88) Архитектура СССР 1940 №.9, Стройиздат, p.21, 1940
- 89) Архитектура СССР 1952 №.11, Стройиздат, p.8, 1952
- 90) Малиновская Е. Г. : op.cit., p.167
- 91) Архитектура СССР 1939 №.5, Стройиздат, pp.57-58,  
1939
- 92) Архитектура СССР 1943 №.4, Стройиздат, p.36, 1943
- 93) Иконников А. В., : Художественный язык архитекту-  
ры, Искусство, pp.120-121, 1985
- 94) Малиновская Е. Г. : op.cit., p.181
- 95) Архитектура СССР 1938 №.10, Стройиздат, pp.37-40,  
1938
- 96) Архитектура СССР 1941 №.2, Стройиздат, p.41, 1941
- 97) Архитектура СССР 1941 №.2, Стройиздат, p.51, 1941
- 98) Архитектура СССР 1946 №.13, Стройиздат, p.32, 1946
- 99) Архитектура СССР 1940 №.12, Стройиздат, pp.53-55,  
1940
- 100) Архитектура СССР 1943 №.4, Стройиздат, p.33, 1943
- 101) Архитектура СССР 1945 №.10, Стройиздат, pp.30-32,  
1945
- Издательство Академии наук Казахской ССР, p.203,  
1953
- 7) Мендикулов М. М. : op.cit., p.204
- 8) Ibid., p.205
- 9) Ibid., p.216
- 10) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г.-Рюнтю,  
Проскурин В. Н. : СВОД памятников истории и  
культуры г.Алматы, Казак энциклопедиясы, p.254, 2006
- 11) Мендикулов М. М. : op.cit., p.201
- 12) Ibid., p.209
- 13) Ibid., p.165
- 14) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г. : op.cit., p.235
- 15) Мендикулов М. М. : op.cit., p.179
- 16) Ibid., p.180
- 17) Архитектура СССР 1953 №.12, Стройиздат, p.33, 1955
- 18) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г. : op.cit., p.279
- 19) Мендикулов М. М. : op.cit., p.164
- 20) Глаудинов Б. А., Сейдалинов М. Г., Карпыков А. С. :  
Архитектура Советского Казахстана, Стройиздат, p.101,  
April, 1987
- 21) Глаудинов Б. : Архитектура Советского Казахстана,  
Стройиздат, p.53, 1974
- 22) Нурпеисов М.М., Малиновская Е.Г. : op.cit., p.276
- 23) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г. : op.cit., p.310
- 24) Гинатулин Дамир : Алматы : тогда и сейчас (アルマト  
イ : 当時と今) , Издательская компания «RUAN», p.16,  
2010
- 25) Барагин Д. Д., Белоцерковский И. И. : op.cit., p.25
- 26) Ауэзов Е. К., Чулакова Н. П., : Алматы.  
Архитектурные хроники (история создания уникальных  
зданий города), p.69, 2010
- 27) Мендикулов М. М. : op.cit., p.168
- 28) Архитектура СССР 1939 №.7, Стройиздат, p.19, 1939
- 29) Ibid., p.21
- 30) Ibid., p.21
- 31) Барагин Д. Д., Белоцерковский И. И. : op.cit., p.7
- 32) Мендикулов М. М. : op.cit., p.172

## 写真・図版出典

- 1) Архитектура СССР 1955 №.9, Стройиздат, p.25, 1955
- 2) Барагин Д. Д., Белоцерковский И. И. : Архитектура  
городов СССР. - Алма-Ата, Государственное издатель-  
ство архитектуры и градостроительства, p.49, 1950
- 3) Басенов Т. К. : Орнамент Казахстана в архитектуре,  
Издательство Академии Наук Казахской ССР, p.156,  
1957
- 4) Архитектура СССР 1954 №.1, Стройиздат, p.14, 1954
- 5) Барагин Д. Д., Белоцерковский И. И. : op.cit., p.47
- 6) Мендикулов М. М. : Архитектура города Алма-Аты.,

## 注

- 1) ロシア語ではДом Советовで「ソビエトの家」は直訳  
に当たるが正確には共産党執行委員会の建物である。
- 2) P.ベーレンスの設計により 1911 年にレニングラード  
に建設された巨大な列柱を前面に配した建築。
- 3) いわゆるジダーノフ批判と呼ばれ、音楽における形式  
主義への批判。1954 年に国民文庫より刊行された「党  
と文化問題」にその経緯が記述されている。

参考文献, 写真・図版は二次資料からの転載  
(受理: 令和 7 年 5 月 13 日)